

令和6年度特色入試問題

《文学部》

「学びの設計書」に関連する論述試験

「学びの設計書に関連する論述試験及び提出書類」についてA～Cの3段階評価

(注 意)

1. 問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
2. 問題冊子は表紙のほかに4ページある。
3. 解答冊子は表紙のほかに2ページあり、そのうち「ます目」の部分が解答欄である。なお、別の下書き用紙2枚を配布する。
4. 試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
5. 解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
6. 解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
7. 解答冊子はどのページも切り離してはならない。
8. 問題冊子および下書き用紙は持ち帰ること。解答冊子は持ち帰ってはならない。

問 次の文章を読み、筆者が論じている「ソクラテス的態度」についてどう考えるか、あなたが学びの設計書に書いたことと関連づけて述べなさい。(800字以内)

「人間にとって、吟味されない人生は生きるに値しない」とソクラテスは公言していました。熱に浮かされた修^{レトリック}辞を好み、議論に懐疑的であったデモクラシーのなかで、彼はこうした批判的問いかけという理想への忠誠を貫いたために命を落としたのです。今日では、ソクラテスの例が西洋における伝統的なリベラル教育の理論と実践の中心をなしていますし、似たような考え方がインドや他の非西洋文化におけるリベラル教育の考え方の中核をなしてきました。すべての学部生に哲学やその他の人文学の科目をひととおり受けさせることが力説されてきたのは、そうした講義が、その内容およびその教育方法を通して、伝統や権威を盲信するのではなく、自分自身で考え議論するように学生たちを促すと信じられているから——そして、このようなソクラテス的なやり方で議論する能力が、まさにソクラテスが言ったように、デモクラシーにとってかけがえのないものだと信じられているからです。

とはいえ、ひたすら経済成長の最大化を目指す世界にあっては、ソクラテスの理想は厳しい状況に置かれています。求められているのが市場向けの数値化できる成果だとすれば、自分の頭で考え議論する能力は、多くの人の目に不必要なものに見えるのです。さらに、ソクラテス的な能力を標準テストで測定するのは困難です。教室でのやりとりや生徒の書いたものをよりきめ細かく質的に評価するのでなければ、生徒たちがどの程度、批判的議論の技能を習得したのかはわからないでしょう。標準テストが学校を評価する基準となるかぎり、ソクラテス的側面はカリキュラムにおいても教育方法においても軽視されるでしょう。経済成長指向の文化は標準テストを好みますし、そうしたやり方で簡単に評価できない教育方法と内容に苛立ちを覚えます。カリキュラムが個人や国家の富を重視するかぎり、ソクラテス的な能力が十分に開発されることはないでしょう。

どうしてこれが問題なのでしょう？ ソクラテスが成長した場であるアテネのデモクラシーを考えてください。多くの点でアテネの諸制度は素晴らしいものです。すべての市民に公的に重要な問題について議論する機会が与えられ、投票にも裁判制度にも市民が参加することが強調されています。実際、軍隊の指揮官を除けば、すべての主要な役職がくじ引きで選ばれていた点で、アテネはどんな近代社会よりもはるかに直接民主制に近いものでした。民会への参加は仕事と居住地によってある程度制限されており、都市の有閑市民層の果たす役割が不釣り合いなほど大きかった——女性や奴隷や外国人のような非市民が排除されていたのは言うまでもありません——とはいえ、エリートではない男性が、

公的な議論に参加し貢献することもできたのです。どうしてソクラテスはこの繁栄したデモクラシーを、彼の広めていた議論の技術によって突かれ、目覚めさせなければならない怠惰な馬だと考えたのでしょうか？

たとえば、トゥキディデスの『戦史』に描かれたような政治的な議論を見れば、人々があまり理性的に論じあっていないのがわかります。彼らが自分たちの主要な政治目標を検証したり、さまざまな重要事項をどう調整するかについて体系的に問いかけたりすることは、皆無ではないにせよ滅多にありません。したがって自己検証の欠如に伴う第一の問題は、目標が不明瞭になってしまうことだとわかります。プラトンは対話篇『ラケス』においてこの問題をはっきりと例示しています。アテネの指導的将軍であるラケスとニキアスは、自分たちには軍事的な勇気があると思っているにもかかわらず、それがどのようなものなのか説明できないのです。戦うに値するものとは何か、最終的な都市の利益とは何かについて考えることが、勇気には含まれるのかどうか、彼らは単にわからないのです。ソクラテスがそのような考えを述べると、彼らは納得します。しかし、そんなことをそれまできちんと考えたことはなかったのです。自分にとってきわめて大切な価値について著しく混乱していたとしても、意思決定が簡単な場合には何の支障もないかもしれません。しかし厳しい選択をしなければならないときには、自分が何を欲し、何を大切にするのかを明確にしておくのはよいことです。プラトンが彼らの自己検証の欠如と、その後なされたシチリア遠征での壊滅的な軍事的・政治的失敗とを関連づけているのはもっともです。アテネのこっぴどい敗北の主要な原因となったのはニキアスだったのです。ソクラテス的な検証は、一連の目標がよいものであることを保証してくれるわけではありませんが、少なくとも、追求されるさまざまな目標の相互関係を明確に捉えることは保証してくれますし、重大な問題が性急さや不注意のせいで見失われることはないでしょう。

自己検証できない人々にしばしば生じるまた別の問題として、あまりにも容易に他人に影響されてしまうことがあります。才能のある煽動家^{デマゴグ}がアテネ市民に、議論としてはひどいけれど感動的な修辞を駆使して訴えかけると、誰もが議論の内容を検証することなくともたやすく影響されてしまったのです。そして、自分が本当に望んでいるのがどのような立場なのかをよく考えることもなく、またもやたやすく影響されて逆の立場に戻りうるのです。トゥキディデスによって語られた、植民市ミティレネの反乱者らの運命を巡る議論にその格好の例があります。自分たちの名誉は汚されたのだと主張する煽動家クレオンに影響されて、民会はミティレネの男たちを皆殺しにし、女子どもは奴隷にすると投票によって決議をします。市のその命令を受けて船が出港します。すると、別の演説者であるディオドトスが民衆をなだめ、慈悲を促します。納得した市民は命

令を取り消す決議を行ない、最初の命令を中止する命令を受けた二隻目の船が送られます。まったく偶然にも、一隻目の船は風がなくて動けなくなっていたために二隻目は追いつくことができたのです。したがって多くの命が、そしてこのような重大な政治的問題が、合理的な議論ではなくて偶然に委ねられていたのです。もしソクラテスが、人々に立ち止まって考察し、クレオンの演説を分析してその主張を批判的に考えるよう仕向けていたら、ディオドトスの冷静さを説く演説がなくとも、クレオンの強力な修辞に抵抗し、暴力の行使を訴える彼の主張に反対した者が少なくとも何人かはいたはずで

す。不決断というものはたいてい、権威への服従と仲間の圧力^{ピア・プレッシャー}によってさらに悪化するものです。これはあらゆる人間社会に内在する問題です。議論そのものが重視されない場合、人間というものは、話者の名声や文化的威光に、あるいは仲間文化の傾向にたやすく影響されてしまいます。対照的に、ソクラテスの批判的探求は完全に反権威主義的なものです。重要なのは話者の地位ではなく、ひたすら議論の中身なのです（プラトンの『メノン』で、問いかけられた奴隷の少年が有名な政治家たちよりも見事な返答をするのは、彼が傲慢でないからだということもあるでしょう）。哲学の教師たちが権威的人物になってしまえば、彼らはソクラテスの遺産を裏切ることになります。ソクラテスがアテネ市民にもたらしたのは、真に民主的な弱さと謙虚さの例なのです。階級、名声、威光には何の価値もなく、議論こそが何よりも重要なのです。

周囲の集団も重要ではありません。ソクラテス的論者はたえず異議を唱える人です。各人の議論だけが物事をはっきりさせると知っているからです。あることを考えている人が多かろうが少なかろうが問題ではありません。数よりも議論にしたがうように訓練された人が、デモクラシーには有用なのです。そのような人は、間違っただけのことや軽率なことを言わせようとする圧力に抵抗することができるでしょう。

検証されない生活を送っている人々のさらなる問題は、しばしば互いに敬意を欠くことです。政治討論がスポーツの試合さながら自陣営に得点をもたらすためのものだと考えられるようになると、「相手陣営」は敵と見なされ、これを打ち負かしたい、辱めたいとすら願うようになるのです。妥協点や共通点を探ろうなどとは思いつきもしないのです。ホッケーの試合でシカゴ・ブラックホークスが敵チームとの「共通点」を探ったりしないのと同じです。これとは対照的に、対話の相手に向けるソクラテスの態度は、彼が自分自身に向ける態度とまさに同じものです。各人が検証を必要としており、誰もが議論の前では平等なのです。このような批判的態度は、各人の立ち位置を明らかにします。その過程で、共有された前提や意見が交わる点が明らかになっていき、そのおかげで市民はひとつの結論を共有する方向に進んでいくのです。

(マーサ・C・ヌスバウム著／小沢自然、小野正嗣訳『経済成長がすべてか？ デモクラシーが人文学を必要とする理由』(岩波書店、2013年)より。一部改変)

[原典] Used with permission of Princeton University Press, from Not for Profit: Why Democracy Needs the Humanities by Martha C. Nussbaum, 2010; permission conveyed through Copyright Clearance Center, Inc.